

先見の形骸団子

田中 秀介

前回の「馴れ初め丁場」では、酒造場という作品を展示する事が前提とされていない環境で、絵がどの様な効力を発揮しうるのか。また、ものとして等しい絵と残置物との境界を見極めながら、絵が酒造場を構成する一つの因子となる事を目指し展示し、結果、絵が入り込むことで、酒造場という場の更新を目論んだ。

今回の「先見の形骸団子」では、ギャラリーという作品を展示する事が前提とされている環境に先の酒造場からその場を構成する因子をかいつまみ、ギャラリーに持ち込んでいる。

酒造場を離れたそれらは、ひと時酒造場という背景を消されたものとして、この環境において作品と呼ばれる事を受容するものとなる。これまで出会う事のなかったこれらのものと、絵をかち合わせ、ものと作品の境界を改めながら新たな事態を作り出すことを目指している。

田中 秀介

[CV]

1986年 和歌山県生まれ
2009年 大阪芸術大学美術学科油画コース卒業

[おもな展覧会]

- 2022 ・個展「迎る粉々の粉」(LEESAYA | 東京)
- 2021 ・もうひとつの世界 (和歌山県立近代美術館)
・絵画の見かた reprise (√K Contemporary | 東京)
- 2020 ・なつやすみの美術館10:あまたの先日ひしめいて今日 田中秀介 (和歌山県立近代美術館)
・個展「あなたの先日ふみこんで今日」(和歌山県立近代美術館企画 | ぎやらりーなかかわ)
・停滞フィールド(トーキョーアーツアンドスペース本郷 | 東京)
- 2019 ・個展「随所、ただいまのかち合わせ」(2kw gallery | 滋賀)
・忘れようとしても思い出せない(ポーダレス・アートミュージアムNO-MA | 滋賀)
- 2018 ・個展「清須市はるひ絵画トリエンナーレアーティストシリーズVol.87田中秀介展-カウンターライフ」(清須市はるひ美術館 | 愛知)
・アーカイブをアーカイブする(みずのき美術館 | 京都)
- 2017 ・個展「ふて寝に晴天、平常の炸裂」(Gallery PARC | 京都)
・アンキャッチャブル・ストーリー (瑞雲庵 | 京都)
- 2016 ・個展「ALLNIGHT HAPS 人と絵の間 こないだのここからあそこ」(HAPS | 京都)
・個展「TWS-Emerging2016 円転の節」(トーキョーワンダーサイト渋谷 | 東京)
- 2015 ・個展「私はここにいて、あなたは何処かにいます。」(Gallery PARC | 京都)
- 2014 ・まよわないために not to stray (the three konohana | 大阪)
・CONSTELLATION 2014 星座的布置展(上野の森美術館)
- 2013 ・個展「回想と突発のわれわれ」(Gallery Morning | 京都)
・有馬温泉路地裏アートプロジェクト 2013(有馬温泉)
- 2012 ・個展「節々の往来」(Gallery Morning | 京都)
- 2011 ・個展「Tanaka Shusuke solo exhibition」(Alternative Space MARU | 韓国)
- 2010 ・個展「華やかな隔たり」(room.A | 大阪)
- 2009 ・S.S.S.(Gallery Den | 大阪)
・サントリー 賞受賞特別展-薄い皮膚(サントリーミュージアム[天保山] | 大阪)
・Art camp 2009(Gallery Yamaguchi Kunst Bau | 大阪)

[受賞]

- 2018 ・はるひ絵画トリエンナーレ 準大賞
- 2016 ・トーキョーワンダーウォール賞 受賞
- 2009 ・第24回 ホルペイン・スカラシップ奨学生
・「Art Camp 2009」サントリー賞 受賞

[コレクション]

和歌山県立近代美術館、清須市はるひ美術館

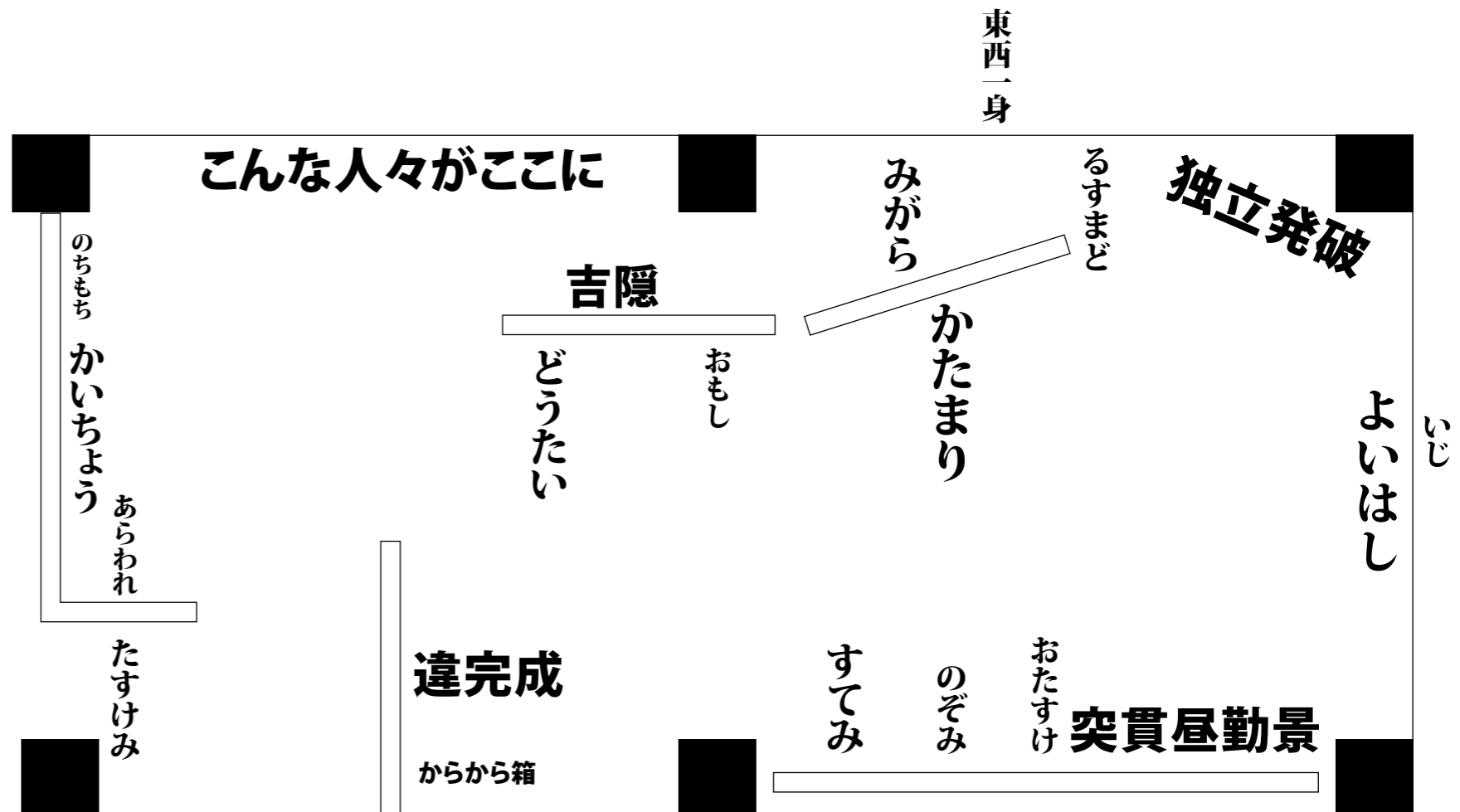
[MAP]

本展は2021年に開催した展覧会「馴れ初め丁場:Beginning of love」の展示作品をもって、ギャラリー・パルクの空間に再構築したものです。

先の展覧会が、築400年を超える旧酒造を会場として、いわば展示空間ではない場に絵画を持ち込むものであったのに対し、今展ではギャラリーという展示空間を場として、田中による絵画とともに、旧酒造よりお借りした品々を会場内に持ち込んでいます。

展覧会『馴れ初め丁場:Beginning of love』の記録映像は、会場内エレベーター前に設置したモニターでご覧いただけます。

それぞれの壁面は、あるまとなりや目論見によって田中なりの団子となっています。そのあたりのことも含めた諸々について、田中が会場でお話しするトークを7月9日・16日・23日の毎週土曜日16時からおこないます。



sube / shirube [reboot]
2021-2022
#02 Tanaka Shusuke
Creating foresight through unity
@ Gallery PARC

#02

先見の形骸団子 Creating foresight through unity

田中 秀介
Tanaka Shusuke

2022年7月9日[土]—7月31日[日]
13時から19時まで 水・木休廊

ギャラリー・パルク

協力 | オーエヤマ・アートサイト

Gallery PARC
GRAND MARBLE

しるべ(再)
とすべ

subeshirube
sube_shirube



*本テキストは2021年に開催した展覧会『馴れ初め丁場：Beginning of love』での会場配布物に掲載したものに加筆・修正したものです。

美術家・田中秀介はかねてより古道具市を覗くのが好きだそう。

「かつてのなにか」たちがひとまず「売り物」として等しく扱われるそこでは、目にした品々はどれも「それそのもの」として現れている。その中には、何に使うのか、なぜ売られているのか、何のためのものなのかなど、なんだかまったくわからないものもある。もちろん品物によってはその成り立ちや来歴を想像したり、その由来や来歴などを知ることによって「それ」に得心がいたりもするものもある。そして、それぞれの背景を知ってもなお、目の前の「それそのもの」の不思議に目を奪われるものもある。古道具市で田中はそうした品々に出会っては驚き、喜び、想像と得心の追いかけて楽しんでいてのではないかと思える。なぜそう思うかという、田中の描く絵は、そんな当たり前さと不思議の追いかけてへと誘い込むかのようなからだ。なんなら田中自身がその追いかけてを楽しむ「すべ」のひとつとして、絵を描き・絵を発見しているのではないだろうか。

田中の描く絵には、どれも当たり前の風景、当たり前の物たちが取り上げられている。食べかけの柏餅、割れた鏡、寝そべった人の足の裏、工事現場、祝箸。これらの事物は、相応の間と時間をかけて「絵」とされたことに恐縮しているのではないかと思えるほどの当たり前さが絵として現されている。しかし、微妙な色彩、荒さと丁寧さが混在する筆跡、つじつまの合わない遠近感、どこかおかしな構図などに目を惹かれて少しの間眺めているうち、やがて私たちは「それがわざわざ絵に描かれた理由」に思いを巡らせられることになる。そして、私たちは目の前に現れた当たり前の絵に驚きながらもそれを訝しみ、いつしか想像と得心をムズムズと繰り返す始める。

このムズムズループから抜け出すためのヒントを求め、絵のタイトルに目を向けるとそこには『たすけみ』『東西一身』『すてみ』『突貫昼勤景』など。絵とタイトルがピッタリと重なって得心するものもあるにはあるが、その多くはさらに想像を掻き乱すものばかりで、私たちはそんなものを掴まされて、さっきよりもっとムズムズした場所に送り返される。

絵を見て、得心した瞬間に次の疑問が生まれ、想像した瞬間に目の前のものが不思議に見えてくる。そしてまた目を凝らす。いつのまにか私たちは、「いま」「ここ」にある「それそのもの」から出発し、想像の道中にたくさんの発見、驚き、困惑を覚えながら、「それそのもの」の不思議に戻ってきてしまう。田中の絵を前に、私たちに生じる「(楽しい) 苦しい」はおそらくこうした理由からではないだろうか。

田中は2021年に築400年を超える旧酒造を会場とした展覧会「馴れ初め丁場」において、この「楽しい苦しい」をつくり出すために、さらにひとムズムズを加えている。

いわゆる絵画と聞くと、多くはタテナガかヨコナガ、まれにセイホウケイといったいわゆる矩形のものを思い浮かべてしまうだろう。しかし田中は旧酒造の気配を強烈に残す空間に、矩形の作品とともに、文字通り「それそのもの」が切り取られたかのような変形の「絵」を滑りこませた。食べかけの柏餅、カメラを構える坊主頭、リンゴの芯、祝箸、おっさん。それらの絵は「絵画」であるというより先に、演劇の舞台上に見る「描き割り」のような印象を放っている。

いわゆる矩形の支持体に描かれた絵の中には、常に「背景」と呼ばれるものが発生している。そして、この「背景」こそが絵を『「かつて(時)」の「どこか(場)」の「なにか」が描かれてるもの』と自動的に定義して(させて)しまうことで、目の前にある「それ」は、あっという間に「かつてのどこかにあったなにかの絵」になってしまう。

もちろん、それは「絵画」が獲得した特権であり、おかげで絵画はどのような場に置かれても内(絵)と外(空間)を都合よく分断し、そこに「かつてのどこかにあったなにか」を展開できる。それはたとえば旧酒造といった個性的な空間であればなおのこと、絵は自立(自閉)することができると考えられるだろう。しかし、「いま」「ここ」に発見した「それそのもの」を描こう(生じさせよう)としているだろう田中にとって、この機能・現象は相応に注意すべきなものであると考えられる。そのために田中の矩形の作品の多くは、そこに勝手に発生してしまう背景を色彩や筆致などによって調整を施し、それらが過分に語り出すことを抑えているように見える。また、変形の作品は背景そのものを捨て去ることによって「それそのもの」にしてみせてもいる。しかし、これは「勝手に」酒造の壁や空間を背景に取り込んでしまうために、今度は配置する場所について配慮するなどの調整をしている。

こうして400年以上に渡って酒造りの場であり、そこで当たり前用いられてきた機材やしつらえが多く残る会場に、田中は矩形の作品によって、この場とは違う「かつて・どこか」を持ち込み、変形の作品によって剥き出しの、それが絵であることすらも問いの対象にした「なにか」を持ち込んだ。そんな「なにか」にでくわした私たちは、絵をよく見た。タイトルをよくよく見た。周囲の事物や空間を見回した。そして絵の中に、絵の周りに、会場の中に、あるいは日々の暮しの端々、遠く・近くの記憶の中に、「なにか？」があふれていることを発見した。

田中の眼と絵を通して「発見の仕方」を発見したのだ。

今展「先見の形骸団子」において田中は、今度はギャラリーという空間において、またも「なにか？」を発生させようとしている。しかし、それは絵画にとってホームとかアウェーとか、矩形とか変形とかといった相対的な関係、その反転といった論点ではなく、もう少し俯瞰的な視点をもって取り組まれた。それこそまだはっきりとは言えないが、「知っているなにか」ではなく、知った気になっていた「なにか」を見つけ出し、腑分けするような手つきの残る構成から、つると新しい発見を発見できる気がしている。

正木裕介 (Gallery PARC)

『すべ としるべ』は、ギャラリー・パルクが2020年より主催するプロジェクト。変容の中にある現在の社会状況にあって、「展覧会」という機会をよりタフに起動させ、残していくための方法の開発・獲得を目的に取り組むものです。

「展覧会」とは、アーティストが表現(すべ)を社会に向けてひらく標(しるべ)であり、鑑賞者は作品と空間・時間をともにするなかで、それぞれにとっての方法(すべ)を発見・体験する機会であるといえます。しかし、表現と社会、表現と鑑賞者が直接的に接することを必然とする展覧会という形式は、それゆえに近年の社会状況の変化の中で、鑑賞者からのアクセスが難しいものとなっています。

『すべ としるべ』は、この現実的な矛盾に対して立ち止まるのではなく、ここから先に進むための試行錯誤に取り組むものです。とりわけ展覧会における記録(映像・写真・言葉)のあり方に焦点をあて、ここに新たな構造を導入することで、記録それ自体による新たな鑑賞・体験の創出を試みるものです。

これまで多くの展覧会における記録(写真・映像・情報)は、まず事実を残すことを目的に、実際の鑑賞体験を補遺・補完する機能を多く担っているといえます。しかし、鑑賞そのものが困難となり、展覧会の記録が補完すべき体験そのものが難しくなった現在、この記録が果たす機能や役割にも変化が必要ではないでしょうか。

『すべ としるべ 2021』は、築400年を超える旧八木酒造を会場に、田中秀介(美術家)の絵画による展覧会「馴れ初め丁場」と、守屋友樹(写真家)のインスタレーション作品により展覧会「蛇が歩く音」のそれぞれを展示公開したものです。それぞれの展示は、いずれも「空間と鑑賞者」を必須として、この場に生じる体験を作品の重要な要素として企図されたものです。では、いま・ここ(展覧会)に生じた「体験」を「読み出し可能」なものとして記録するには、どのような方法があり得るのでしょうか。

また、本プロジェクトは、この展覧会とともに、それぞれの展示に取材した麥生田兵吾(写真家・映像作家)と今村達紀(振付家・ダンサー)による映像、野口卓海(美術批評・詩人)の編集・制作による記録物とにより構成されます。ひとつの展覧会を起点に、映像・記録がそれぞれの眼差しから作品や表現を発見・解釈し、それぞれの媒体の特性をもって「つくる・のこす」ことに取り組めます。

従来の「展覧会」と「その記録」という不可逆的な補完関係からそれぞれが自立して「のこす」こと。それらが読み出される時に再び関係することで『そこ』に新たな体験を「おこす」こと。これにより展覧会という体験がより広く、より遠くに「ひらく」ことの可能性に目を向け、そのための(すべ)を編み出していきます。

本展「田中秀介：馴れ初め丁場」の記録映像は、会場内エレベーター前に設置したモニターでご覧いただけます。